



No.47 / Spring 2022

会 長 滝浦 真人

事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学 秦かおり研究室内

事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行口座 記号・番号:00900 - 130378 日本語用論学会

支店番号:099(店名:〇九九) 当座預金 口座番号:0130378 日本語用論学会

《会長再任ご挨拶》

ポスト・コロナのPSJに向けて

滝浦 真人 (放送大学)

PSJ 会員のみなさま、こんにちは。2 期目の会長を仰せつかった滝浦です。任期始めに当たり、ご挨拶かたがた、1 期目のご報告と 2 期目に向けた課題などを含め、少々誌面をお借りしたく思います。お付き合いいただければ幸いです。

◆第 2 四半世紀へ

PSJ は 1998 年冬に第 1 回大会を行っていますので、2022 年度の大会@京都大学で PSJ25 となり、つまりは四半世紀の節目を迎えることとなります。多くの先達たちの力をもって、学会はすくすくと育ち、昨年度末時点で(「会員」と認定される人の数としての) 会員数が約 600 人弱の所帯となっています。

関西の地で産声を上げた学会ですが、規模の拡大に伴って全国化も進みました。PSJ15 までは (PSJ6 の神奈川大学以外すべて) 関西を中心とする西日本での開催でしたが、PSJ16 が東京の慶應義塾大学で開催されて以降、名古屋大学(東西の境界?)、杏林大学、その後コロナ禍で幻となりましたが、創価大学、東北大学と、東日本を北上しました(するはずでした)。会長も、初代の小泉保先生から、澤田治美先生、山梨正明先生、林宅男先生まで、18 年間は関西の大学所属の会長が続きましたが、PSJ19 の 2016 年に加藤重広先生が関西以外の大学から初の会長として就任

されました。不肖私がお後を継いだ格好となっています(所属の放送大学は全国区? ですが本部は千葉の幕張にあります)。

今年度から PSJ は、第 2 四半世紀へと歩みを進めていくことになります。全国から、そして海外からも、ますます多くの語用論学徒を惹きつけ、「研究者の交流協力のセンターとして機能し、語用論の拡大と深化への中心的役割を果たしながら、その成果を「若き研究者の手に引き継ぎ」いでいくことが、学会としての存在意義であり会長としての責務であるものと気持ちを新たにしています(引用は『語用論研究』創刊号の小泉会長「発刊の辞」からお借りしました)。

◆会長の仕事

学会の規模や財政規模が大きくなるにつれ、公的組織として整備しなければならない事柄も増えてきます。まだ同志の集まりという性格が強い初期のうちには問題とならなくても、ある程度以上大きくなると公共性の位置付けが変わることとなり、会長の仕事もそうした面に関わるものが大きな比重を持つてきます。

先代の加藤会長は、学会の組織面について大きな改革を進められました。学会の「運営委員」(現「評議員」)を、前運営委員が推薦した候補者名簿からの選挙で決め、選ばれた運営委員による互選によって会長を選ぶという間接選挙方式が整備されました。これは、公的組織の運営のあり方としては、非常に大きな一歩でしたし、後に続く者としては、そうしたクリアな視界の中で運営に携わることができるという大きな安

心感を得ることができ、そのような地ならしをしてくださった前会長には大変感謝するところです。次に続く者たちが安心して仕事をできるようにするという会長の仕事は大きい、としみじみ思いました。

私の会長としての仕事は、過去に遡った会計上の不手際をお詫びし、実はかなり危険な状態にあった学会財政を建て直すところから始まりました。それは偶然の為せる業でもありましたが、そのようにして学会財政に対する意識を持たざるを得ない状態から始まったことで、その後もずっと PSJ の財政的あり方について考え続けることとなりました。

財政危機についてのご報告を先にさせていただきますと、現在に至る過去 3 年間の繰越金は次のように推移しております。

《過去 3 カ年の繰越金推移》

2019 年度→2020 年度 約 20 万(財政危機)

2020 年度→2021 年度 約 150 万

2021 年度→2022 年度 約 260 万

きれいに回復してい(るように見え)ますが、別段これは会長の手腕といったことではなく、コロナ禍の“おかげ”で支出が非常に抑制されたことによって、支出を収入が大きく上回ることとなった結果です。単年度の会費収入に近い程度の蓄えができたことで、臨時的に支出が増加する場合に増加分を吸収できるよう、3 種類の「基金」としてプールするという仕組みを採用することもできました。おかげさまでこれは、財政の安定化に寄与するものと思われま。

◆赤字体質の PSJ?

ではそれでよろこんでよいかというと、どうもそうとは言えない、というのが会長を 1 期務めた所感です。かつては“手弁当”的なボランティア精神が強かったこともあり、学会財政には相当な余裕がありましたが、会員皆さまからお預かりしているお金で運営されている公的組織として、出すべきお金は出し、使うべきお金は正しく使おうという方針が立てられました。そうして、事務局諸費をはじめ、国際交流やシステム開発などにかなりの金額を支出するようになったところ、蓄えは“順調に”減っていきました。そのことで学会財政がよく見えるようになり、そうなったところで PSJ の収支構造を概観してみると、収入がさほど多くない割に支出の額は多くなりがちで、そう多くのことがやれているわけではないのに、財政的には余裕がないという“赤字体質”であることがわかりました。

概算の概算ですが、過去数年間の収支実績を基に、PSJ の年間収支構造を表にしてみました。

コロナ前とコロナ禍下とコロナ後で大きく変わる(であろう)項目があるため、やや複雑になりますがご覧ください(表中、[BC]=コロナ前、[WC]=コロナ禍下、[AC]=コロナ後、です)。

《PSJの“お財布事情”》(ここ数年の実績から見た概算)

会員数	600人
会費納入ベース	470人

主な収入合計	310万
年会費収入	270万
大会参加費	40万

主な支出合計	380万 [BC]	200万 [WC]	280万? [AC]
事務局関係	100万 [BC]	20万 [WC]	60万? [AC]
システムなど	50万		
S/P製作費(送料込)	100万		
大会論文集関係	20万		
講師招聘・派遣	90万 [BC]	10万 [WC]	50万? [AC]

臨時支出	
大会時施設使用料	40万+

まず、収入ですが、600 人分の額とはなっておりません。会費納入ベースで見ますと 470 人程度という数になり、どうやらこちらが実勢に近い数字のようです。年会費収入に大会参加費を合わせて、計 310 万程度というのが平均的な収入規模です。

では支出はというと、コロナ前後でかなり変わります。コロナの影響を受けない項目は数字も 1 つですが、そうでない項目は 3 つの数字が入っています。「事務局諸費」は会議の交通費や弁当代などでかなり嵩んでいました。コロナで会議はすべてオンラインになったことで、大きく下がりましたが、コロナ後は、大会がリアル開催となれば会場スタッフの件費や弁当代がかかりますので、それなりの額になります。「講師招聘・派遣」の項目も大きく変わります。コロナ禍で国際交流を基本的に抑制していましたが、以前は(積極的に使っていたこともあり)かなりの額でした。コロナ後は、オンラインを併用しながら多少戻していくとして、中間的な数字としています。これらに、比較的金額が一定している諸費が加わりますが、学会誌 S/P の製作費が送料込みで 100 万という数字が目に入ります。ここまですべての支出の合計が、コロナ前だと 50 万の赤字、コロナ禍下では 110 万の黒字、コロナ後の仮置き数字では 30 万の黒字、という皮算用になります。但しこの最後の数字も、大会時に施設使用料が発生する場合は、国立大学でも 40 万ほど取られるご時世ですので、単年度会計では赤字となります。

とはいえ、まあトントンで維持できる程度ならいいのではないかとと思われるかもしれませんが、上で「そう多くのことがやれているわけではない」と書いていたことを思い出してください。大会を実施して学会誌を発行すること、これはたしかに学会としての基本ではありません。ですが、それだけで十分かと考えてみると、ちょっと寂しいとは感じられないでしょうか？ 例えば、昨今、よその学会からは頻繁に「セミナー・講習会」といった（主に）教育的な会員サービスの案内が届きます。PSJでもやりたいと考えましたが、このような財政構造だと、全額参加者負担の形でしか行うことができません。コロナ禍も相まって、残念ながら会長1期目には実現できませんでした。2期目は、事業委員会の方向性を、国際交流から会員サービスへと振り向けることにしましたが、それでもやはり、そう多くない収入に見合う形で支出を抑えないと、基本以上のことはなかなかできないという現実を考える必要があるとの考えに至りました。

◆ポスト・コロナのあり方

歴史上、パンデミックはいつも、人類の生活を質的に変えてきました。今回のコロナは、人間と人間の間隔を変えました。社会的な距離が必要とされたために、近い関係は遠くなりました。その一方で、物理的な接触がなくてすむオンライン技術が急速に進歩し、遠い関係が一気に近くなりました。学会の大会でも、世界どこからでも参加することが容易になり、PSJでも、海外にいる複数のメンバーを含んだチームがワークショップを行うといった例が実現しました。こうして、コロナ後の世界では、物理的な意味での距離というもの自体が相対化されていくことでしょう。

これまでの世界では、“リアル対バーチャル”という対立軸で、リアルの方がいい（に決まっているが）、間に合わせとしてはバーチャルでもいい、という具合に捉えられてきました。ですが、例えば大学の授業でも、ゼミで共に触れ合ったりじゃれあったりして得難い友を持つといった面ではリアルに勝るものはなさそうでも、材料を提示して考えてもらうところから知見を導くといった面では、Zoomなどによるオンラインの（ときにオンデマンド併用の）授業の方がむしろ充実感があって効果的だ、といった感覚を抱いた教員も多いものと思います。

学問の世界も、すでにそうした方向へと動いていたのではないかと、今回あらためて感じさせられることにもなりました。物理的な存在であるということが、従来ならそ

らの方がいい（に決まっている）と考えられてきたのが、世界はすでにそうではなくなりつつある、ということが、かなり進行しつつあるからです。現在の学問的営為は高度にネット依存的であると言って（少なくとも語用論の世界で）反論は来ないと思います。皆さんも、例えばCiNiiで論文を検索して、ヒットしてダウンロードするのはpdfで論文本体が入手できるものになりがちではないでしょうか？紙でしか読めないけれどもぜひ読みたいと思って図書館で取り寄せてもらう、といったケースはあってもむしろ少なくなっていると思います。簡単に言えば、ネットで入手できない論文は読んでもらえる確率がとても低くなるのが現在の学問世界だということになります。そこでは、紙という物理的な媒体であるということが、メリットではなくデメリットになっています。

本学会のS/Pは、刊行後2年間は「公開猶予」期間とされ、会員外には公表されません。これは会員の特権であるという面もあると同時に、刊行している出版社の商業的利益を担保するためでもあります。せっかく論文が掲載された著者からすれば、すぐにでも広く読んでほしいところが、その先2年間は個人的に抜き刷りや原稿などを送るしか術がない、というのは辛いことでしょう。（これは、例えば博士課程の1年目で掲載できたとしても、公開されるのは博士号が取れた翌年になる、ということの意味します。プレプリントを個人サイトなどで公開するといったことも行われていますが、それはやむにやまれぬ手段として広まっている“抜け道”にすぎないとも言え、学会としてどうこう言えることではないように思います。）出版社としてこの条件を変える余地はないそうです。

さらには、公開猶予期間が過ぎた後、CiNiiから検索してpdfが入手できるかということ、学会員にはあまり気づかれていないかもしれませんが、実はそれもできません。学会のウェブサイトでは公開されることとなりますが、CiNiiはすべてのウェブサイトから拾う検索エンジンではないので、現物が入手できるリンクは張られず、ああpdfは公開されないのか、と思われてしまう可能性が増します。こうした現実を「会員の特権」と言われても、ピンと来ないのではないのでしょうか？世の中が変わってしまった、とはこういうことを指すのだと思います。

上で学会誌S/Pのことに触れました。刊行ごとに平均100万かかるという現実、PSJの財政的体力からするとだいぶ重たいと言うべきでしょう。もちろん、有名出版社の刊行物として学会誌を出せるようにすることには、先達の大きなご

尽力があったからにはほかなりません。そのことで PSJ が得たプレスページも決して小さからぬものがあつたと思います。しかし、その恩恵も含めた上で、学会のあり方として現在においてどう考えるか?については、得失を冷静に比較しながら独立の問題として検討することが必要です。とりあえず経費の面からすれば、製作費のおよそ1/3ずつを占める紙代(物理的な紙の経費)と印刷費がなくなります。オンライン化した場合には文献のハイパーリンクなどを埋め込む作業が発生するので、組版費は高くなりますが、それらを合わせて、費用はおおよそ現状の半分前後になるものと思われます。

論文や本は紙で読みたいという人はもちろん一定数おられますが、オンライン刊行の場合でも、版下は作られるので、希望者への頒布という形で冊子体でも届けることはもちろん可能です。そうしたことを考えると、現在の学問的世界において、紙媒体での刊行ということがメリットになる点は(開拓社という有名出版社からの刊行という以外)かなり限られてくることとなります。会長1期目の終わりから2期目の始めにかけて、これらの点を執行部で検討した結果、学会誌 S/P をオンライン化すると提案することとなり、3月下旬に開かれた(拡大)常任委員会にて会長提案としてご審議いただき、反対意見表明なしの賛成多数でご承認いただきました。それを基に、5月下旬に開催される評議員会でお諮りする予定です。

この件が最も大きいのはたしかですが、ほかにも、大会のリアル/オンラインの棲み分け(ハイブリッド化?)や、従来は大会時に1回だけ開催していた評議員会の開き方(今回もオンラインですし、5月開催も初めてかと思えます)、さらには会員サービスの企画のあり方など、ポスト・コロナにおける学会のあり方について、考え得ること・可能性はたくさんあると思っています。

これまで積み重ねてこられたものを大事にしながら、世の中の流れから取り残されることがないようにしたい、そして、次を担ってくださる方たちが安心して具体的な施策を考えていけるように、若い方たちのお考えをたくさん聞いて、できる地ならしはしておきたい、というのが2期目にして最終期となる会長の望みです。

あと2年間、どうかよろしくお支えいただけますよう、お願い申し上げます。

付記：S/P オンライン化は、5/22開催の評議員会で承認され(賛22, 白1)決定されました。
(滝浦 真人)

語用論研究の新潮流 (6)

「右翼的政治言説の語用論分析ー ドナルド・トランプの談話分析研究」

山口征孝(神戸市外国語大学)

2022年5月現在、ロシアによるウクライナ侵攻が世界に大きな暗い影を落とし、平和だと思われた日本においても、外国からの侵略を受けるかもしれないという危機感を覚える方も多いただろう。他の諸国に目を移しても右傾化する政治的潮流(ブラジル、フィリピン、トルコ、ハンガリーでの極右政権の誕生や、フランス大統領選でのル・ペン候補を擁する極右政党の躍進)と、これらの極右政治家の言語使用(語用)は決して無関係ではないだろう。このような状況下で、言語学者(語用論学者)は、大学の研究室の中で、社会と切り離された言語研究をするしかないのだろうか。本稿は、ドナルド・トランプ前大統領の談話分析研究(McIntosh and Medoza-Denton 2020; Kramersch 2020)を紹介することで、語用論の「古典的」理論である発話行為理論、(新)グライス派語用論、ポライトネス理論などが、政治言説の分析にも役立つことを示唆する。これらの研究の特徴の一つに、「発話内行為(illocutionary force)」から「発話媒介行為(perlocutionary effect)」の解明へ分析の焦点がシフトした点が挙げられる。以下では、Hodges (2020)と Kramersch (2020)を参照しながら、発話行為の十分な理解には、これまで以上に広い社会・文化的知識を分析に含める必要があると論じる。

翻って、政治言説の語用論分析は、新しいものではない。上記の「正統派」語用論の系譜に対し「異端」の語用論分野として、特定の政治的立場から談話を分析する批判的談話分析(Critical Discourse Analysis、以下 CDA)の伝統がある。CDAでは、その主要な研究者の所属するヨーロッパ社会を中心に政治言説の批判的分析が行われている(近年の右翼的政治言説の分析は Wodak 2020 参照)。一方、CDAとは別の伝統から生まれた北米の言語人類学者(及び広義の社会言語学者)による語用論研究に、McIntosh and Mendoza-Denton (編著)の *Language in the Trump Era: Scandals and Emergencies*(2020)がある。本稿ではこの編著を中心に、北米とヨーロッパの両方を射程に入れた Kramersch (2020)にも触れながら、語用論の新しい潮流を紹介する(ヨーロッパの最新の政治言説分析に関しては Verschueren (2022)を参照)。

McIntosh and Mendoza-Denton (2020)では、以下の論考が特筆に値する：(1) 発話行為理論 (Hodges) と(2) グライスの協調の原理と会話の公理を応用したトランプの発話分析 (Hodges; Jacquemet)、(3) 政治談話で使われる定冠詞 (the) の語用論分析 (Mendoza-Denton)、(4) トランプの政治集会で使われた命令法 (“Get'em out”) のパース記号論的分析 (Sidnell)、(5) トランプ談話と他の談話の間テキスト性 (McIntosh; Hodges)、(6) トランプの女性蔑視的冗談 (banter) と男性間の連帯 (Cameron)、(7) トランプ的白人優越主義の談話分析 (Alim and Smitherman)、(8) トランプが政治演説で使ったジェスチャーのマルチモーダル分析 (Goldstein, Hall and Ingram)。紙面の都合上(1)に絞り、主に発話行為理論を応用した分析として、Hodges (2020)の“Plausible deniability”とKramsch (2020)の第4章“I do things with words, therefore I am”を参照しながら、新しい語用論分析の一例を考察する。それは、2017年2月に、当時の連邦捜査局 (FBI) 長官のコーミー (James Comey) が閣僚会議後にトランプ大統領と二人きりになった際に言われたとされる発話である。背景知識として、コーミーは、トランプの前大統領補佐官 (国家安全保障問題担当) であったフリン (Michael Flynn) がロシアと共謀して2016年の大統領選挙へ介入した疑惑を捜査していた点が重要である (以下人物のタイトルは原則省略する)。コーミーはトランプに執務室で “I hope you can let this go. I hope you can see your way clear to letting this go, to letting Flynn go. He is a good guy” と言われた (コーミーがこの会話後に取ったメモ書きがメディアに流出したことで公表されたデータである)。この発話後もロシアと大統領選挙への介入を共謀した疑いでフリンの捜査を続けたコーミーは同年5月に FBI 長官の職をトランプにより解任された。

上記の状況でなされたトランプによるコーミーへの発話はどのような発話行為と考えるべきだろうか。ここで重要なのが、トランプはどのような「発話媒介行為(perlocutionary effect)」を意図したかである。この問題を考えるには、発話を行ったトランプとその受け手であるコーミーとの制度上の力関係、発話が行われた状況、そしてこの発話を解釈するための社会・文化的知識を考慮する必要がある。コーミーは2017年6月の議会の証言で、上記のトランプの発話は、イングランド王ヘンリー2世が1170年にナイトに対して言った “Will no one rid me of this meddlesome priest?” と同じで、「命令 (directive)」であると解釈したと答えた。この発話の “meddlesome

priest” とは、ヘンリー2世の政敵であるカンタベリー大主教のベケット (Thomas Becket) を指し、ヘンリー2世の上記の間接発話 (疑問文) を「命令」として解釈したナイト4人がベケットを殺害した出来事を間テキスト的に指している。つまり、あの状況でトランプが部下であるコーミーに “I hope you can let this go” と言ったらならば、フリンの捜査をやめるように命令する (directive) 発話行為とみなされるのが妥当である (しかし、トランプ大統領及び共和党上院議員のリッシュ (Risch) は、“hope” ということばの狭い言及指示的意味にだけ焦点を当て、トランプの発話は、単に「希望・要望 (expressive)」を意図した発話行為であるとして、トランプ大統領による司法妨害の疑いを否定したのである)。

以上の短い分析から、「発話媒介行為 (perlocutionary effect)」の解明には、発話が行われたその場の状況だけでなく、社会・文化的知識 (特に、政治制度上の大統領と FBI 長官の力関係や歴史的に受け継がれた間接発話による命令に関する知識) を分析に含めることが必要不可欠だとわかる。本稿では、右傾化傾向が顕著な現代世界の政治状況を踏まえ、トランプ前大統領の談話研究の紹介を通し、語用論分析の射程に政治言説を含めることを論じた。今後の更なる語用論研究の発展が混沌とした現代世界のより深い理解に貢献することを期待したい。

参考文献

- Hodges, A. (2020). Plausible deniability. In J. McIntosh & N. Medoza-Denton (Eds.), *Language in the Trump Era: Scandals and emergencies* (pp. 137-147). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kramsch, C. (2020). *Language as symbolic power*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McIntosh, J. & Mendoza-Denton, N. (Eds.). (2020). *Language in the Trump era: Scandals and emergencies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Verschueren, J. (2022). *Complicity in discourse and practice*. New York: Routledge.
- Wodak, R. (2020). *The politics of fear: The shameless normalization of far-right discourse*. London: Sage.

(山口征孝)

** PSJ25 (第25回大会) ご案内 **

日本語用論学会第25回大会は、以下のとおり、京都大学(京都市左京区)での開催を予定しております(ただし、社会状況を鑑みてオンライン開催に変更する可能性もあります)。

◆日時: 11月26日(土)、27日(日)

◆場所: 京都大学吉田キャンパス(吉田南構内)
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
(アクセスについてはP.7-8をご参照ください。)

★開催方法変更時の案内について

オンライン開催に変更する場合は、学会公式ウェブサイトと会員メーリングリストで告知します。

◆主なプログラム

大まかなプログラムは以下を予定しております。タイムスケジュールや変更点など、詳細は追って学会公式ウェブサイトと会員メーリングリストでお知らせいたします。

《11月26日(土)》 《11月27日(日)》

☆口頭発表①

☆ワークショップ

☆会員総会

☆講演

(☆懇親会)

☆口頭発表②

☆ポスター発表

☆シンポジウム

◆発表募集

発表形態は、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの3種類です(発表言語は日本語ないしは英語)。各スケジュールと応募要項は以下をご覧ください。皆様のご応募をお待ちしております。

● 投稿締め切り: 2022年8月15日(月)

● 採否通知: 2022年9月中旬頃

● 大会発表要旨(Abstract)原稿締切: 2022年9月下旬頃

● 大会発表論文集(Proceedings)原稿締切: 2023年3月31日(金)

◆応募要項

①申し込み資格

口頭発表・ポスター発表の第一発表者、ワークショップの代表者として発表を申し込むには会員である必要があります。なお、ワークショップは司会者を含めて3名以上の団体である必要があります。

②発表形態と発表時間

1) 口頭発表: 発表25分+質疑応答10分

2) ポスター発表: 1時間(掲示時間)

3) ワークショップ: 1時間40分

※1. 発表は会場にて対面形式で行うことを原則といたします。ただし、新型コロナウイルス感染症に関わるやむを得ない事情が生じた場合には、すみやかに大会発表委員会にご相談ください。

※2. 社会状況を鑑みてオンライン開催となる可能性もあります。その場合、発表方法が変更となりますので、予めご承知おきください。

③発表言語: 日本語または英語

④申し込み先

発表の申し込み先は、学会ホームページの会員専用ページ「マイページ」内にあります。この「大会発表応募ページ」は6月下旬頃にオープンする予定です。投稿方法の詳細は後日学会ウェブサイトでお知らせいたします。

⑤申し込み原稿の形式

発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ形式です。

用紙サイズ: A4 縦

規定文字数: 日本語 2,500字以内、英語 500 words 以内。日本語の場合は文字数を、英語の場合は word 数を、原稿の末尾に記入してください。

ファイル形式: Microsoft Word 形式 (doc, docx)、PDF 形式(pdf)

- ・氏名と所属は記入しないでください。
- ・発表タイトルを1行目に、タイトルの後を1行空け、次の行から本文を記入してください。
- ・ワークショップの場合は、発表者全員分の要旨が規定文字数に収まるようにまとめてください。
- ・文字数と word 数には、例文、表、キャプション、注釈を全て含みます。ただし、図形内のオブジェクトに添えられた文字や参考文献は含みません。日本語原稿の中にアルファベット等の半角文字を含む場合、半角文字2文字を1字と数えます。
- ・参考文献の書式は『語用論研究』に準じます。
- ・指示された形式やファイルフォーマットに従わずに申し込んだ場合、内容にかかわらず不採用となることがあります。
- ・タイトル(サブタイトルを含む)は、(大会発表委員会、大会総務委員会から依頼する場合

を除き)一切変更はできません。採択や発表後に公表される「プログラム」「要旨集」「大会発表論文集(Proceedings)」に掲載されるタイトルは、申込時のタイトルとなります。なお、発表応募時に(「マイページ」内の)「大会発表応募ページ」に記入するタイトルと、ファイルで提出される申し込み原稿内のタイトルが一貫しているか、入念にご確認をお願いいたします。

⑥申し込み原稿の留意事項

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやすさと説明の一貫性が求められます。かつ、以下のような点について過不足なく論じる必要があります。

- ・問題となる現象
- ・その現象についての先行研究と問題点
- ・現象の分析に用いるデータ
- ・現象の分析方法
- ・現象の分析結果
- ・分析結果に基づく結論と理論的含意

⑦申し込み制限

一人の会員が発表者として申し込みできるのは、一大会につき2件(ワークショップ含む)までです。かつ、第一発表者、または、ワークショップの代表者として申し込みができるのは一大会につき1件のみです。

⑧二重投稿の禁止

申し込みにおいては、二重投稿を禁止します。大会発表委員会が二重投稿と認めた場合、その申し込みは受理されません。かつ、次年度の大会においても当該者を発表者に含む申し込みは受理しません。

- ※1. 二重投稿とは、他の学会で既に発表した、もしくは発表を申し込み中である内容、または、既に学術的刊行物に掲載された、もしくは投稿中である論文と極めて類似する内容で申し込むことを指します。
- ※2. 学士論文・修士論文・博士論文は、公表や出版がされていない場合、「学術的刊行物」には含めません。
- ※3. 学会の発表や学術的刊行物の掲載へ応募したものであっても、既に不採択が決定している内容を申し込む場合は、二重投稿に含まれません。

⑨選考結果の通知

選考結果は9月中旬に第一発表者、または、ワークショップの代表者宛に通知します。

⑩No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会発表委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ウェブサイトにて公表します。ただし、事前、または、当日に(やむをえない場合には事後に)、発表を行えない(行えなかった)合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆問い合わせ先

発表申し込みに関するお問い合わせは、下記アドレス宛に8月8日(月)までにお問い合わせいたします。

E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp

(大会発表委員長・西田光一宛)

◆第25回大会会場・京都大学への交通・宿泊について

[大会会場について]

会場：〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学吉田南キャンパス(吉田南構内)
国際高等教育院棟(キャンパスマップ87番)



最寄駅・所要時間：京阪出町柳駅・徒歩15分

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus#yoshida>
[交通について]

★京都大学吉田南キャンパスは、JR 京都駅前バスターミナル(D2のりば)から京都市営バス206号系統(東山通經由北大路バスターミナル行き)、またはJR 京都駅八条口バス乗り場(E1)から循環路線バス(フープ)にご乗車いただき、京大正門前または京都大学前にて下車ください(所要時間約30分、交通事情により市バスは1時間ほどかかることもあります)。各バスの乗り場は以下のリンクをご覧ください。

★なお、JR 京都駅からの交通事情の影響を受けにくいルートは、京都市営地下鉄(烏丸線)国

際会館方面にご乗車いただき、今出川駅(K06)にて下車した後、烏丸今出川バス停から京都市営バス 201 号系統(東山通經由百万遍・祇園行き)に乗り継ぎいただくものとなっています。

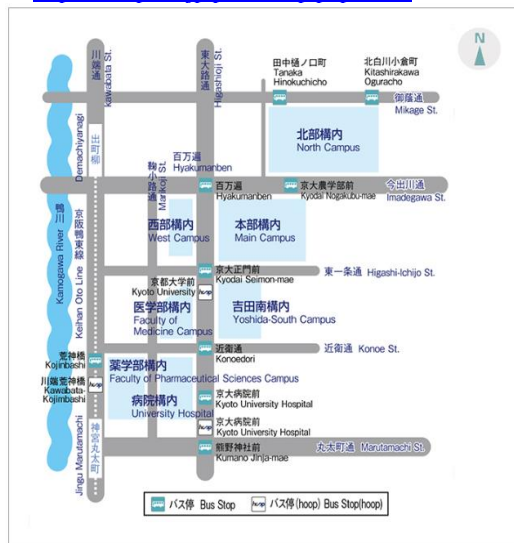
★JR 京都駅は東京駅から新幹線で2時間15分です。

・京都市営バス：

https://www2.city.kyoto.lg.jp/kotsu/webguide/ja/bus/busstop_bunsetu.html

・循環路線バス：

<https://hoopbus.jp/place/stop.php?no=1>



〔宿泊について〕

京都市街中心地(四条烏丸)周辺の宿泊が便利です。四条烏丸からは京都市営バス 201 号系統(東山通經由出町柳行き)で移動できます。京都市内にはビジネスホテル、観光ホテル等が多数ありますが、感染状況が落ち着いている場合、観光等で満室になる可能性が高いため、宿泊のご予約は各自にてお早めをお願いします。

場合によっては大阪府や滋賀県のホテルでもJR 京都線・琵琶湖線の沿線なら比較的短時間でご来場になれます。交通機関を確認のうえ、ご利用ください。

◆第24回大会、大会発表賞受賞者発表

受賞者：平尾恵美(舞鶴工業高等専門学校)

大会発表タイトル：

「従属節発話における文脈と慣習性-「単純な」/「慣習化された」主節省略の分析から-」

受賞理由：本発表は、英語の主節が省略されたif節に焦点をあて、話し手から相手への申し出

や感情表出などの発話行為がif節単独で遂行される語用論的条件を慣習性の段階から明らかにしようとした試みであり、定型表現を含む構造の連続性を提案した点に獨創性がある。先行研究の外観と自身の分析を、限られた時間内で手際よくまとめるパフォーマンス力はおおいに評価できる。他にも、自分の説明を聴衆に伝える意識が高い、まとめと次に示す方向を述べてから次のスライドへ移行というトランジションがうまく配置されている、質疑における回答も簡潔・明晰でまとまりがあったなどの高評価を受けた。

表彰ならびに記念品贈呈：第25回大会期間中に開催される会員総会の席上、表彰が行われます。

◆◆研究会コーナー◆◆

◆中四国九州地区研究会

中四国九州地区からのお知らせとして、本学会員の金澤俊吾さん(高知県立大学)からご自身が編者に入った新刊書をご紹介します。語法研究と言語理論の相互作用にご関心のある方は、ぜひお読みください。各論考の行間に語用論との接点を探るのも有益と思います。

(山口県立大学・西田光一)

昨年(2021年)9月、ひつじ書房より、金澤俊吾・柳朋宏・大谷直輝(編)『語法と理論との接続をめざして——英語の通時的・共時的広がりから考える17の論考』を刊行しました。以下、本書を紹介したいと思います。

本書は、英語における語法(言語現象)を、共時的・通時的側面から正確に記述し、理論的説明を行う、18名の執筆者による17編の論考が、5分野(意味論6編、英語史4編、統語論3編、形態論2編、談話分析2編)に分かれて収録されています。

本書の目的は、語レベル・句レベル・構文レベル・談話レベルにわたる様々な語法(言語現象)を、記述的にも理論的にもバランスのとれた分析、説明を行うことで、英語の語法研究と理論研究の懸け橋を目指すところにあります。

本書には、次に挙げる3つの特徴がみられます。第1に、古英語から現代英語にいたるまで、共時的・通時的に幅広い英語において、先行研究で扱われてきた言語現象、扱われてこなかった言語現象に対し、それぞれの理論的基盤に基づき、新たな知見を提示している点です。

第2に、英語の用例を、多様な媒体から収集し、実証的に検証している点です。文献からの引用だけでなく、文学作品からの用例、様々なコーパスからの用例、ネイティブ・スピーカーの判断による用例を検証しています。

第3に、取り上げる英語の語法を、他言語との比較や、コーパスによる頻度効果、言語使用の通時的推移の考察など、多様な方法論を用いて検証し、共時的・通時的説明を展開している点です。その上で、これらの経験的事実は、形態論・統語論・意味論・英語史などの言語学の下位分野に、あるいはそれらの複合分野に、立脚することで、説明されています。

本書は、英語の語法研究の対象とされる言語現象の裾野の広さと、英語の語法研究の新たな面白さ・奥深さを示すことができていると自負しています。また、いずれの論考も、それぞれの理論的立場から、語法と理論の接続と、今後、各言語理論に対して、さらに貢献できる可能性を提示できていると思います。(金澤俊吾)

◆メタファー研究会

例年開催されている日本語用論学会メタファー研究会ですが、今回はHLC(「言語と人間」研究会)との共催により、「マルチモダリティ」と言語をテーマとするオンライン・シンポジウムを、2021年12月27日(月)・28日(火)の2日間にわたり、OBIRIN講堂(バーチャル講堂)にて開催しました。百数十名のオンライン参加者を得、シンポジスト・一般発表者・招聘発表者とオーディエンスとで、活発な議論がかわされました。

総合司会・進行：八木橋宏勇(杏林大学)
シンポジウム司会：篠原和子(東京農工大学)
一般発表司会：野村佑子(順天堂大学)
一般・招聘発表司会：多々良直弘(桜美林大学)

【第1日】12月27日(月)
開会挨拶 篠原和子
(東京農工大学・「言語と人間」研究会会長)
10:00~11:15 講演1.
「音と声の共感覚メタファー」
辻田麻里(国際基督教大学)
11:15~12:30 講演2.
「図像的メタファー(pictorial metaphor)に見られる概念メタファーのマルチモダリティ性について」
松中義大(東京工芸大学)
14:00~14:30 一般発表1.
"A Multimodal Discourse Analysis of Cohesion in Student Online Presentations"

Lindenberg Dennis(早稲田大学[院])
14:30~15:00 一般発表2.
「言語記号の空白部分の解釈について」
浜田秀(天理大学)
15:15~16:30 講演3.
「産業とマルチモダリティ」
坂本真樹(電気通信大学)

【第2日】12月28日(火)
10:00~10:30 一般発表3.
「<自己領域へのモノの移動>から<不快な経験をする>へー「てくる」構文に見られる<不快感>について」
夏海燕(神奈川大学)
10:30~11:00 一般発表4.
「無生物の構成部分について述べる状態・性質の「する」構文の表現」
大神雄一郎(大阪府立大学)
11:00~12:00 招聘発表
「共感覚比喩を支えるマルチモダリティ」
楠見孝(京都大学)
13:00~14:15 講演4.
「共感覚の文字と色はどう結びつくか」
浅野倫子(立教大学)
14:15~15:30 講演5.
「『赤さ』は知覚か意味か：子どもの色語習得の事例から考える」
佐治伸郎(鎌倉女子大学)
15:45~17:00 講演6.
「視覚的メタファーの分析からファッションデザインと言語の創造性を考える」
宇野良子(東京農工大学)
閉会挨拶 楠見孝(京都大学)
(篠原和子)

* * 委員会・事務局より * *

★大会総務委員会プロシーディングス担当より
目下、大会総務委員会(プロシーディングス担当)では、2021年度第24回年次大会で発表された論文をとりまとめ、『大会発表論文集』(Proceedings)(第17号)(電子媒体のみの発行)を作成いたしております。ご提出いただきました原稿は、7月上旬頃に当学会ホームページ上にて公開する予定です。
原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございます。
(竹田らら)

《事務局より》

★2021 年度会計報告（案）

収入合計	4,626,040
年会費	2,844,000
一般	2,548,000
学生	268,000
団体	28,000
大会参加費	285,000
印税	32,604

収入小計	3,161,604
予備費（前年度繰越金）	1,464,436

支出合計	2,002,514
------	-----------

大会論文集作成費	150,150
S/P 製作費	621,165
印刷費・郵送費	183,203
事務局諸費	174,260
人件費	69,000
文具費・会議費など	59,693
事務業務委託	40,837
手数料	4,730
学会システム維持費・利用費	121,000
会員管理費	500,000*
レンタルサーバ使用料	86,596
言語系学会連合会費	30,000
講師謝金・渡航費	95,000
年次大会施設使用料	22,000
オンライン大会準備費	19,140

予備費	1,723,526
大会開催基金	300,000
国際交流基金	300,000
S/P 制作基金	300,000

*2021 年度分は 2022 年度に請求がある予定で、
過年度分含む¥500,000 で仮置き

★大会会計報告

収入合計	285,000
大会参加費	285,000
支出合計	432,370
大会論文集作成費	150,150

事務局諸費	146,080
人件費	69,000
文具費・会議費など	34,098
事務業務委託	40,837
手数料	2,145
講師謝金	95,000
施設使用料	22,000
オンライン大会準備費	19,140

収入合計-支出合計	-147,370
-----------	----------

★2022 年度予算（案）

収入合計	5,458,526
------	-----------

年会費	2,500,000
一般	2,310,000
学生	160,000
団体	30,000
大会参加費	250,000
有償セミナー等	50,000
印税	35,000

収入小計	2,835,000
前年度繰越金	2,623,526
支出合計	2,595,000

大会論文集作成費	150,000
S/P 製作費	1,000,000
印刷費・郵送費	190,000
事務局諸費	185,000
人件費	70,000
文具費・会議費など	60,000
事務業務委託	50,000
手数料	5,000
学会システム開発	70,000
学会システム維持費・利用費	120,000
会員管理費	500,000
レンタルサーバ使用料	80,000
言語系学会連合会費	30,000
講師謝金・渡航費	100,000
年次大会施設使用料	150,000
オンライン大会準備費	20,000

予備費	2,333,526
国際交流基金	230,000
S/P 制作基金	300,000

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員
4,000 円、団体会員 7,000 円です。学会財政の

問題もあり、できれば7月末までにご納入いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj-at-outreach.jp

★激甚災害被災会員の皆様の会費・大会参加費免除について

日本語用論学会では、激甚災害などで被災された会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2022年度会費」ならびに「2022年度年次大会の参加費」を免除しております。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

免除申請先（メール、郵送のいずれも可。ご連絡いただきましたら、手続きの詳細をご連絡いたします。）

日本語用論学会事務局

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8

大阪大学 秦かおり研究室内

E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp

(北野浩章)

★《新刊・近刊案内》★

■『ことばの「省略」とは何か』尹盛熙（著）大修館書店（定価 2,500 円＋税）

本書は「何を」「どこで」「なぜ」省くか？という問いに答えることを通して、私たち自身が省略とは気がつかない省略や若者言葉に見られる省略まで、数多くの身近な実例を紹介している。筆者は「ことばを使う人間が「省きたい」「語りたい」という二つの相反する欲求の間で balan



スをとる中で、省略という戦略をどのように活用しているか(v)と述べており、その視点が興味深い。第1章から第3章までは日本語について、第4章以降は韓国語との比較となっている。韓国語について興味がある研究者はもちろん、前半の日本語部分だけでも読み応えがあり、各章にコラムを設けることで、初学者にもわかりやすい構成で手に取りやすい1冊である。(2021.09.10刊)

■『異言語間コミュニケーションの方法—媒介言語をめぐる議論と実際』木村護郎クリストフ（著）大修館書店（定価 2,600 円＋税）

本書は異言語間コミュニケーションの諸手段



を体系的・網羅的に考察する1冊である。二部構成になっており、第一部はヨーロッパの議論について書かれている。異言語間コミュニケーションに関わる諸概念に関する先行研究や枠組みについて丁寧に説明し、第二部では第一部で概観した手段が実際どのように使用されているかを、ドイツ・ポーランド国境を事例に詳細に議論していく。本分野を網羅的に取り上げた初めての書であり、諸言語研究者のみならず、少なからず本学会にもいるであろう語学教育に携わる教員には是非手に取って一読を促したい一冊となっている。(2021.09.10刊)

■『「させていただく」の使い方—日本語と敬語のゆくえ』椎名美智（著）KADOKAWA（定価 900 円＋税）

本書は、同著者による『「させていただく」の語用論—人はなぜ使いたくなるのか』（2021、ひつじ書房）をベースに、一般読者向けに書き下ろされた新書である。芸能人が多用する「させていただく」の事例で幕を開ける本書は、ときに「違和感がある」と否定的に評されつつも「なぜ『させていただく』はこれほど使われるのか」という言葉



の謎の正体に語用論的アプローチで鋭く、そして軽快に迫っていく。第一章「新しい敬語表現」では、街なかで採集された豊富な実例をもとに当該表現の使用実態を明らかにし、続く第二章「ブームの到来」にて「させていただく」の言語学的な立ち位置が明快に論じられている。第三章「違和感の正体」では700人の意識調査、第四章「拡がる守備範囲」ではコーパス調査の結果をもとに丁寧な考察が提示され、「させていただく」の魅力が徐々に明らかになっていく。第五章「日本語コミュニケーションのゆくえ」は、「させていただく」分析に磨きをかけるべく、考察の総仕上げが行われている。「させていただく」の過去、現在、そして未来が鮮やかに描き出されており、言語のダイナミズムを感じられる一冊となっている。(2022.1.8 刊)

■『[場と言語・コミュニケーション](#)』岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子(編) ひつじ書房 (定価 3,600 円+税)



本書は、シリーズ『文化と言語使用』の第3巻として出版された。本書では、言語学に「場」という概念を導入し、場の中での相互作用という観点からさまざまな言語的・語用論的現象を説明していく。前半の3つの論文、「場の理論概説」、「場の言語学・語用論とその展開」、「認知言語学から場の言語学へ」では、どのような学史的背景から場の理論が生まれたか、そしてそこから見える言語・コミュニケーションの特徴などが体系的に論じられる。続く5つの論文では、人称の現れ、直示表現、複合動詞、などの日英語の現象が分析される。最後の論文『「場」における身体性とコミュニケーション』では場の議論において、身体の役割を取り込む必要性について論じる。本書を通じて、「場」は相互行為において副次的に生じるものではなく、むしろ我々の言語・コミュニケーションに大きな影響を与える存在であることが明らかになる。またこの本は、場の理論という日本人にとって借り物ではない理論を展開し、精緻化させることで、世界の言語学界に大きな知見をもたらすことを教えてくれる1冊である。(2022.1.31 刊)

■『改訂版 [社会言語学 基本からディスコース分析まで](#)』岩田祐子・重光由加・村田泰美(著) ひつじ書房 (定価 2,200 円+税)

本書は2013年初版の「概説 社会言語学」の改訂版である。旧版よりもさらにディスコース分析に関連する部分を多く取り扱い、文系から理系までより幅広い読者層を意識してバージョンアップしている。第1章から第8章にかけて、社会言語学の基本がカバーされており、基礎知識を確認したの



ち、新たに加えられた第9章「ディスコース分析」が続く。ここでは、第10章から第15章で扱われるコミュニケーションの民族誌、相互行為、異文化コミュニケーションの解釈枠組み、会話分析、語用論を具体的な分析のアプローチとして位置づけ、後続する第15章まで具体例を用いてディスコース分析の手法を紹介している。第16章、第17章では、言語と思考・文化、イデオロギーとの関わりにも言及し、最後の第18章で社会言語学がいかんして現実社会へ貢献可能かを考察している。基礎知識から学術的貢献までが流れよく配置され、充実した一冊である。本書の特徴は、比較的平易な日本語で、特に後半で多くの実例を盛り込んで、丁寧に説明されている点である。これにより、社会言語学の初学者も学びやすい、また生きた言葉と向き合い分析する社会言語学のスタンスを理解しやすい、魅力的な書である。

(2022.3.10 刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■ コロナの状況も好転の兆しを見せ、少しずつ

対面で集まれるようになってきました。学会も対面に戻っていくでしょうが、オンラインの恩恵に気づいてしまった(?) 私たちは、それをどう組み込んで新しい日常生活を築いていくかが課題であると思います。とりあえず、オンラインの恩恵があったとしても国際学会は現地に行きたいなあ、と思っています。(秦かおり)

■ 最近の報道では、コロナ感染予防のマスクの着用が緩やかになり始めたニュースを見聞きするようになりました。状況が少しずつ改善していくのを感じます。これからは、コロナ禍で得た便利なコト・モノを活用しながら、新しく明るい日常をエンジョイできることを祈るばかりです。(野村佑子)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 47 号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2022 年 6 月 1 日

[広報委員会]

- \* 委員長：秦かおり
- \* Newsletter 編集担当：野村佑子
- \* 公式ホームページ担当：  
横森大輔・名塩征史
- \* 会員メーリングリスト担当：  
八木橋宏勇・木本幸憲

E-mail: [webmaster-at-pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster-at-pragmatics.gr.jp)